

案

（仮称）南部コラボセンターにおける図書館機能について

（提言）

平成29年（2017年）3月31日

豊中市立図書館協議会

平成 29 年（2017 年）3 月 31 日

豊中市立岡町図書館
館長 北風 泰子様

豊中市立図書館協議会
委員長 岸本 岳文

（仮称）南部コラボセンターにおける図書館機能について（提言）

本協議会は、標記の件について、慎重に審議を進めてきましたが、このたび結論を得ましたので、次のとおり提言いたします。

豊中市立図書館協議会委員

舟岡 直子	小学校長会
大野 俊介	中学校長会
荻原 まゆみ	こども園長会
天瀬 恵子	豊中図書館の未来を考える会
松田 美和子	豊中子ども文庫連絡会
◎岸本 岳文	学識経験者
○渥美 公秀	学識経験者
瀬戸口 誠	学識経験者
樋口 名子	市民公募

◎委員長 ○委員長職務代行

目 次

1. はじめに	1
2. (仮称) 南部コラボセンター基本構想について	2
3. (仮称) 南部コラボセンターにおける図書館機能について	4
(1) 南部地域の図書館の現状について	
① 子育て支援機能	6
② 学習支援機能	6
③ 学校連携機能	7
④ 就労支援機能	8
⑤ それ以外の機能	9
4. おわりに	10

1.はじめに

豊中市におけるこれからの図書館の配置計画と各図書館のありようについて、図書館協議会では『豊中市立図書館の今後の戦略的な施設配置について ― 特色ある図書館づくりや地域の知の拠点としての施設のありようなどをふまえて』として平成26年3月に答申を行いました。この時点ではまだ構想段階にあった（仮称）南部コラボセンターが、その後図書館を核とした複合施設として具体的に計画が進められることになったことを受けて、平成28年7月に岡町図書館長より（仮称）南部コラボセンターを中心とした豊中市南部地域における図書館機能について図書館協議会に諮問がありました。

図書館協議会は先の答申において、（仮称）南部コラボセンターの開設が庄内図書館と庄内幸町図書館の配置見直し・再編にもつながる可能性を踏まえて、次のような指摘を行っています。

- ・学校図書館支援ライブラリー・教員支援資料の機能移転が必要となる。
- ・近隣担当校（庄内小学校・島田小学校・第六中学校）への担当窓口変更が必要になるが、対応が可能かどうか。
- ・統合したうえ現在より便利な場所、広い面積のワンフロアが実現した場合には、現在より効果的効率的な業務が可能になる。

そのうえで（仮称）南部コラボセンターに地域の知の拠点としての図書館が入ることで、南部地域のまちづくりに図書館が積極的な役割を果たすことができるはずであるとし、そのためには平成20年に開館した複合公共施設「千里文化センター コラボ」で図書館と市民が協働して事業に取り組んできた経験を南部地域の特性を活かしたかたちで展開していくことが求められるとしています。

このことを前提として本図書館協議会では、南部地域の特性とそれに対応する図書館機能に焦点を絞って検討を重ねてきました。もとより地域には図書館に対するさまざまなニーズや期待が存在しています。図書館の基本的な機能は資料・情報の提供であり、それを支えるのが資料・情報の収集と組織化という働きです。地域で行われている多様な活動は、地域の資料・情報を丹念に集めて整理し発信していくという図書館の働きと結びつくことによって、より深みを増していくはずですが、これから計画がさらに具体化していくなかで、図書館には図書館の働きが地域の活性化に役立つものであるということを積極的に伝えていくことと、そのうえで地域の声に丁寧に耳を傾ける姿勢と、それを事業につなげていく発想や工夫が必要となってきます。

ここに取り上げられたことが出発点となって、図書館員が地域に足を運び地域の人たちと語り合うなかで新たな図書館機能が創り出されることを、また地域の人たちが図書館員と図書館について話すことを通して自分にとっての図書館、自分の住む町にとっての図書館を再発見してもらうことを願って、図書館協議会の提言とします。

2. (仮称) 南部コラボセンター基本構想 (平成 26 年 3 月作成) について

(「(仮称) 南部コラボセンター基本構想」パンフレットより抜粋)

豊中市の南部地域は、歴史のあるまちで活気にあふれています。とりわけ昭和に入ってから、商工業を中心に発展し、人口も急増しました。駅前に集積する商業は賑わいを生み、ものづくり企業の集積はまちに豊かさをもたらしました。また、由緒ある神社や大阪音楽大学が立地するなど歴史的・文化的な社会資源が豊富で、祭りなどを通じたご近所づきあいは下町らしい人情味のある豊かな風土を生み出しています。

一方で、少子高齢化が進み、まちの活気に陰りが見えはじめています。また、長期の景気低迷などによる社会経済環境の変化は、地域経済や住民生活、更には、次世代を担う子どもたちの健やかな育ちにも影響を及ぼすことが懸念されています。

この基本構想は、南部地域の学校や施設で構成する整備検討会議や、市民会議、ラウンドテーブルなどでの意見を集約し、求められる施設とその機能、連携のあり方、取り組むべき事業のイメージをまとめたものです。今後はこの基本構想を基礎として、(仮称) 南部コラボセンター建設に向けて皆様のご意見をお聴きしながら調査検討を進め、さらに具体化させていきます。

5 つの基本方針

① 地域へのほこりと南部地域のブランドを市民が主体となって創造する

地域へのほこりと地域ブランドを市民が主体となって創造する取り組みを喚起し、支援し、南部地域内外へ発信します。

② 生活面の課題を改善し、「いきいきと」「充実した」暮らしと福祉を実現する

南部地域にかかる教育や福祉など関連する施策やネットワークの連携・整備・充実を図り、住民への直接的な支援と、自律した生活に向けた支援を行い、地域住民の「いきいきと」「充実した」暮らしと福祉の実現をめざします。

③ 地域を担う次世代を地域全体で育む

(仮称) 南部コラボセンターは、教育、子育て支援の拠点として、地域を担う次世代を南部地域全体で育むしくみづくりに取り組みます。

④ 老朽化し、散在する公共施設やサービスを取りまとめ、市民サービスの拠点を形成する

市有施設の有効活用の観点も踏まえて、複合的な機能を備えた施設を整備し、ワンストップ型の市民サービスの向上を図ります。また、市民、事業者、NPO、市との協働によるまちづくりに向けたネットワークの拠点施設としての機能の充実を進めます。

⑤ 地域の教育環境の再編と連動、連携して地域ぐるみの教育に取り組む～ (仮称)

南部コラボセンターの機能を補うサテライト機能の設置 ～

南部地域の活性化に向けた各種取り組みの拠点となる複合施設の整備と合わせて、

小中学校などの教育施設や地域のコミュニティの拠点となっている公共施設などにサテライト機能を設置することで、ネットワークを形成し、地域ぐるみで教育環境の向上を進めます。

(仮称) 南部コラボセンタービジョン

● (仮称) 南部コラボセンターは、5つの基本方針のもと、南部地域活性化の拠点として機能する施設です。

● 本構想の特徴は、地域全体の公共施設の再編と教育環境の再編を並行して行い、地域のきめ細かなネットワークと地域外や多様な事業者ともつながる大きなネットワーク、すなわち、「(仮称) 南部コラボセンターネットワーク」を形成し、拠点施設として(仮称) 南部コラボセンターを位置づけていることにあります。

● めざしているのは、広域かつ多様な歴史・文化を有する地域が、多様なしくみや事業によってつながり、南部地域が元気になるとともに、地域を担う子どもたちが夢や希望を持てるようになることです。

そこで、基本構想を広く南部地域の市民で共有し、具体化していくためのキャッチフレーズとなる(仮称) 南部コラボセンタービジョンは、「**子どもに夢を！地域に輝きを！南部地域がまとまる、つながる、元気になる。**」とします。

【参考】 以下の内容は平成29年2月14日と18日開催の南部地域連携センター主催の市民説明会資料より抜粋

施設・機能整備の基本的な考え方

①【既存】老朽化し、散在する公共施設の複合化・多機能化

● 公民館、図書館、老人福祉センター、出張所、労働会館、保健センター

②【新規】地域課題の解決・地域ブランド創造に資するもの

● 子育てしやすい環境づくり

⇒ 子育て支援拠点、学力向上地域学校連携拠点、キャリア教育

● 安定した就労への環境づくり ⇒ 就労・生活困窮者支援拠点 (キャリアセンター)

● 地域課題の解決や地域ブランド創造につながる市民活動推進の環境づくり

⇒ 市民活動・NPO活動支援拠点

その他

① 地域ブランド創造・多文化共生・学力向上地域学校連携拠点・キャリア形成拠点については、会議室等を活用した事業(プログラム)展開を想定

② 福祉事務所については、サテライトでの配置を想定

③ サテライトについては、本館との機能連携を図り、本館で実施する事業のサテライト展開や、本館の設置理念を実現する「現場(市民活動拠点・ものづくり工房・発表練習場等)」としての位置づけを想定

3. (仮称) 南部コラボセンターにおける図書館機能について

(1) 南部地域の図書館の現状について

図書館が(仮称)南部コラボセンターという施設の基礎、土台としての役割を果たし、地域の課題解決に役立つ図書館となるための機能を担うために、以下に述べる4つの基本的サービス、子育て支援、学習支援、学校連携、就労支援を展開していくことが必要である。

これらのサービスを考えるにあたり、はじめに、この4つの機能について、南部地域の図書館(庄内図書館・高川図書館・庄内幸町図書館)の現状を確認しておきたい。

子育て支援については、「ブックスタート事業 えほんはじめまして」など様々な事業を、子ども文庫、おはなしボランティア等市民や関連部局との連携を深めながら展開している。成人も含めて図書館利用が低調な南部地域において、特に「ブックスタート事業 えほんはじめまして」については、保護者と赤ちゃんに出会える貴重な機会として、継続して実施している。

高川図書館については南部地域連携センターおよび公民館とともに、ベビーヨガなどを実施し、保護者が図書館に来館するきっかけづくりとするとともに、近隣の子育て支援センターなどとの連携もすすめている。

学習支援については、南部の高川図書館内にあるスペース「ぶらりあん」、庄内図書館の児童室や協働事業スペースの開放を中心に自習を認め、子どもたちの学習の場の確保を公民館など他の施設とともに行っている。また高川図書館では平成26年度より庄内公民館と連携して学習サポートを夏休みに行き、大学生ボランティアによって近隣の小学生の夏休みの宿題の支援を行っている。庄内図書館でも、しょうないREKの事業の一環として同様の事業、「夏休み宿題おたすけプログラム」に取り組んでいる。

学校連携については、各小中学校に学校司書が配置され、公共図書館と学校図書館の間で資料面はもちろん、研修の場をもつなど、連携を深めている。庄内幸町図書館は学校図書館支援ライブラリーによって読書や調べ学習の支援、さらには教員向け資料についても収集、貸出を行ってきた。

また、各図書館では読書や調べ学習の支援以外にも子どもたちの成果物、おすすめの本の帯やポップを展示するスペースを設け展示を行っている。

就労支援については、平成25年度から「暮らしの課題解決講座・図書館でビジネス」と題し講座をおこなってきた。平成27年度からビジネスゼミナールとして新たに産業振興課と企画段階から連携し、各分野の専門家を招いて、「起業」などに関する講座を開催、その際は司書が資料紹介を行っている。

庄内図書館では3階の協働事業スペースをしょうないREKの実施日、火曜日以外

は自習室として開放しているが、普段あまり来館されない30代～50代の方が資格取得の勉強に利用されている光景も見られる。

その他庄内図書館では、課題解決支援サービスの一環として、多文化共生サービスを担っており、日本文化、日本語を学ぶための資料や外国文化を知る多文化共生資料コーナーを設置している。「しょうないREK」における「外国人親子にむけた高校進学相談会」や岡町、千里図書館とともに外国人女性と子どものための居場所として「おやこでにほんご」を開催している。また、地域のニーズに応じて近隣の商店街で実施しているしょうないバルへの参加、高齢者施設へのリサイクル本の無償譲渡など、多様な事業に取り組んでいる。

これらの状況をふまえ、図書館の果たすべき機能について図書館の4つの機能を中心とした論点で議論を深めることを通して、多様な世代に利用され、地域の課題解決につながる（仮称）南部コラボセンターのあり方について明らかにしていきたい。

① 子育て支援機能

(仮称) 南部コラボセンター基本構想において、市内の他地域と比較して生活面で課題を抱える家庭が多い状況であることが報告されているが、図書館はこれらの地域課題を解決するために図書館の機能を活用した役割を担うと考えている。現在図書館ではおはなし会などを通して絵本やおはなしの楽しさを届けることで子どもたちに働きかけているが、同時に子育てに頑張っている親世代も元気になるような講座を企画するなど、親子ともに元気になり自己肯定感を持てるよう、応援する事業を行う施設であってほしい。

幅広い年齢層が集まる図書館を保護者と子どもが気軽に利用することで、交流が生まれることも予想される。大人がいきいきと図書館を活用するためには子どものころからの利用経験の積み重ねが必要となる。現代は様々な情報があふれ、生活するうえで情報リテラシーの能力が求められている。だからこそ、重要なことは乳幼児期からの継続的な図書館利用であり、そのことが大人になっても図書館を使いこなすことにつながるのではないか。

一方で子育て支援に関する図書館の機能を果たすためにはハード面の工夫も欠かせない。以前ある子育て支援センターに外から見えるプレイルームが開設された際、地域の人たちにとって保育所の中に入ることに戸惑いや不安があったが、口コミやPRを通して利用が広がってきた事例がある。これは外から中の様子が見えることが施設に入りやすくなる一つの要因と考えられるからである。図書館をより入りやすい施設とするためにはガラス張りにする等ハード面の工夫とともに、その存在をアピールして地域の市民に周知していくことが必要となる。

② 学習支援機能

(仮称) 南部コラボセンター構想において図書館は交流拠点機能として位置づけられているが、図書館はそもそも情報発信や学習支援の機能を備えており、生活・学習等支援拠点機能として捉える必要がある。交流拠点機能としては、図書館が行っているレフェラルサービス、すなわち情報源となる他機関・他施設につなぐ機能が該当する。学習支援機能が十分に機能することで、交流拠点機能の側面も発揮されるため、一方を強調しすぎることは望ましくない。

いつ行っても図書館には自分のための本があり好きな本にめぐり会えると誰もが思えること、これこそ図書館が「居場所」と言われる所以であろう。子どもたちの発達段階に応じそれぞれ自分なりの本が見つけられるから、図書館が行って楽しい「居場所」になるのではないか。そこに行けば、様々な発見もあり、学べる施設であることを広く周知することも求められる。

図書館が生活に潤いや豊かさをもたらすものだという事は、小さい頃からの図書館利用体験があって初めて理解されることである。図書館は、子どもたちが生きていくのに勉強

は直接必要ではないという考えに陥るのを防ぎ、心の豊かな人間・豊かな大人になるために勉学はあると理解できるよう、環境を整える努力をしてほしい。

小中一貫校の9年間を通して、学校図書館教育を体系的に積み上げていくことはもちろん重要であるが、(仮称)南部コラボセンターの公共図書館に小さい時から親しむことで、学習と生活の関連性を自然に身に付けていくことができるのではないか。(仮称)南部コラボセンターの図書館を利用し、調べて考えて、日常生活というそれぞれの場へ戻っていく、そのようなイメージの(仮称)南部コラボセンターであってほしい。高校生・大学生・大人など様々な世代の人々が同じ空間に集い交わる姿に、子どもたちが接することで、生活と学習のつながりを実感しやすくなるのではないか。

南部地域には、様々な背景を持った子どもがいる。子どもたちが絵本の読み聞かせや本と出会う機会も、おのずと少なくなりがちで、学年が上がり学習内容が難しくなるにつれ、学習意欲が低下していく傾向があるならば、図書館が果たすべき生活・学習等支援拠点機能は非常に大切になってくるだろう。南部地域の子どもたちが、本が身近にあり図書館に行くことが楽しいと感じて育つこと。多様な本と出合い子どもたちが豊かに育っていくことを大切にしていきたい。

今の子どもたちは学校図書館の充実もあり図書館の使い方や調べ学習などに親しんでいるが、親世代には図書館は本を読むところという認識程度で、何かを調べるために利用するという発想をもつ市民は少数派ではないか。公共図書館は、子どもたちと親の世代の図書館利用を巡る認識のギャップを埋めていく努力をする必要がある。図書館を使うことのメリットを、子どもたちの親世代や働く世代・高齢者にどう伝えていけるか。たとえばアメリカでは、カーネギーのように図書館を利用することによる成功体験などもあり、図書館利用における成果を実感している利用者が多い。

図書館の児童サービスの一つの基本として、大人になっても図書館を利用できる能力を養成していくことがある。調べて発見することの楽しさが身につけば、将来にわたり図書館を積極的に利用できる人に育つ。極言すれば知識は十分でなくとも調べる能力があり、図書館があればどこでも生活できる。将来の働く世代になっていく子どもたちを、図書館の使える人に育てることが大切である。

③学校連携機能

豊中市では全小中学校に学校司書が配置されているが、この学校図書館を中心とした教育を体系的に積み上げていくことが効果的である。公共図書館や学校図書館で本や多様な情報、人にふれ、高校生、大学生と成長する段階に応じて学びを深めることにより、学習と生活の関連性を意識することにつながる。

学校から図書の日やクラブ活動等に公共図書館を訪ね、より広い資料から調べることが出来るように連携することが必要であろう。

また、学校単位での活用とは別に、子どもたち自身が主体的に利用できるような働き

かけを図書館として行っていくことも求められる。子どもたちが自ら考えて図書館を利用することで、図書館の職員や地域の多様な世代の人とつながりが生まれ、子ども達の社会参加体験となっていく。このような働きかけを学校と連携して行っていくことが大切である。

学校図書館の利用教育の充実で、国語の授業の一環や趣味や心を豊かにする読書だけでなく、体育だと筋肉をどう鍛えたら記録を伸ばすことが出来るかなど、全教科にわたり学校図書館を使って学習することが可能となる。学校図書館でこれらの本を使える子どもになると、大人になっても図書館が問題解決に役立つという発想が持てる。情報リテラシーの面で言えば、情報に振り回されるのではなく自分にとって必要な情報は何かを考え、それを自分で考えて選び取っていく力は図書館で培われていくのだと思う。これらの目的を実現するために、公共図書館と学校図書館との連携は重要である。

④就労支援機能（他部局・団体との連携）

庄内地域の働き盛りの世代の図書館利用登録者数は、すでに「千里文化センターコラボ」のある千里地域に比べ圧倒的に少ない。機能以前の問題として、まず、この世代の人に図書館にはどんな魅力があるか、どう伝えるかが大切なことである。

また、仕事自体を求める方、ステップアップを望む方、あるいは転職したい方が望むこと、それぞれの利用者を想定することで自ずと方向性が見えてくる。（仮称）南部コラボセンターの就労支援もそれぞれの人の思いに寄り添ったきめ細かいものにする必要がある。

単身の働き世代は、時間的にも来館機会が少なく図書館側もサービス対象として念頭に上らないことが多い。この世代にとって、図書館はまだまだ活用されていない施設であり、日常生活の中で図書館が位置づけられていない。図書館は働き世代が持つ少ない自由な時間、その貴重な時間に見合うサービスをどう提供していけるか、また、働き世代自身が、図書館に行く意味を見いだすことのできる仕掛けを提供できるかが大きな課題である。

そのためには働き世代が自身の価値観に見合う「お得感」を得られるようにしたい。たとえばこの世代が定年後の人生設計を考えるためのセミナーの企画なども考えられる。さらに商工会議所と連携して各事業所に働きかけ、業務として勤務時間内で図書館を活用してもらうなど仕組みから変えるようなことを提案できればよい。

図書館の基本的な役割はつないでいくこと。（仮称）南部コラボセンター全体が有機的に機能するためには図書館がレフェラルサービス機能を中心に据えて、様々な地域の情報を収集整理し、地域の人々にフィードバックするとともに各分野のスペシャリストにつないでいくことが必要である。

⑤それ以外の機能

市内他地域の図書館と比較して、南部地域の図書館においては貸出人数、貸出冊数などの利用が低調であることから、各世代の潜在的ニーズを発掘しきれていない状況が伺える。そこで南部地域のニーズをふまえたサービスを提供することが求められる。

まず、高齢化率が高い地域として、高齢者の生きがいがいづくりにかかわる図書館とはどのようなサービスが必要となるだろうか。高齢者に図書館をいきいきと利用してもらうために、単なる「居場所」ではなく、くらしに必要な資料や情報を提供するような高齢者を対象とした図書館サービスの検討をすべきである。その中には定年退職後のいわゆる「元気なシニア世代」も含まれる。会社とのつながりのなくなった世代に次は地域とつながっていくしかけづくりを図書館が行うことで地域での活動が広がっていくことになる。

さらにすべての人に対しての情報提供として、障害者サービスの充実も欠かせない。たとえば現在南部での利用が低調な点字図書、デイジー（録音図書）などの多様なメディアの資料提供、さらに対面朗読のサービスなど、関係機関と連携しながら身近な図書館で情報を得られる場とする。

地域の情報拠点として、図書館の情報収集能力、編集能力を発揮する形で南部全体に情報提供するためにはサテライトが欠かせない。第十二中校区内にある高川図書館が（仮称）南部コラボセンターのサテライトに位置付けられていることから、（仮称）南部コラボセンターとのサービス内容の連携、分担についても検討していくことが求められる。

4. おわりに

図書館には本来の業務として資料・情報提供とともに、施設内外の他機関につなぐ役割がある。例えば子育て支援、就労支援などのサービスにおいては相談窓口につなぐ、あるいは地域の人材につなぐことも業務の一つと考えられる。(仮称)南部コラボセンター施設全体の情報提供の核となることをめざし、図書館が責任をもって行えるような仕組み、ハードウェアをそなえるべきである。そのためには基本となる図書館の資料・情報提供機能とあわせ、他機関を有機的につなぎ、コラボ構想に明記されている生活、学習等支援機能、交流拠点機能としての役割を果たせるような蔵書構成、サービス内容、および施設内での人の流れを生み出す工夫が必要となる。ハード、ソフトの両面においてバリアフリーを意識した施設として、敷居が低く、初めて図書館を利用する市民でも気軽に立ち寄ることができる、立ち寄りたと思う建物を実現させてほしい。そうすれば図書館への来館を通して、施設全体における多機能なサービスの入り口となる可能性が高まるからである。誰もが入りやすくするために、例えばガラス張りにしたり、天井まで空間を区切る壁にせず、低いパーテーションで仕切るなど、中での活動の様子や雰囲気わかり、入るきっかけとなるような仕組みなどが考えられる。

ソフト面については、図書館へ行く動機や意味につながるような仕掛けを積極的に考えていくことが重要である。(仮称)南部コラボセンターでの図書館サービスの成否はこのあたりに掛かっている。地に足の着いたサービスは、地域のニーズを把握しないと展開出来ない。地域の人にどんな期待があるのか、持ってもらえるのか、与えられるのか、これらを踏まえながらトータルでのサービスを考えていくべきである。

図書館が施設全体の多様な機能の核となることで、様々な世代の市民が「居場所」となるようなスペースを提供することができる。そこでは施設内の様々な機能が活用でき、魅力的な本や情報、人との出会いが待っている。

最後に防災の拠点としての役割にふれておきたい。平成7年の阪神淡路大震災において、豊中市南部地域は大きな被害を受けた。災害時の避難所としての拠点機能も(仮称)南部コラボセンターが担う予定となっており、その際に図書館がどのような役割・機能をもつか、防災計画の中に位置付けられるよう関係課に働きかけることが必要となる。災害時の拠点となる(仮称)南部コラボセンターに本があることでより意味のある場所となるであろう。

南部地域には地域課題があると同時に、また地域としての強みがある。南部地域のニーズに合わせた図書館サービスを提供することによって、他部局と連携した子どもたちの学習支援、幅広い世代へのくらしの支援につなげ、さまざまな人と人との出会いの場ともなることで異世代の交流を生み、負の連鎖を断つことも可能となる。

今後も継続して市と市民が南部地域にふさわしい図書館のあり方をともに考え、図書館としてその存在を地域住民から認められてこそ、将来の(仮称)南部コラボセンターの図書館が活用され、その機能が発揮される。生涯にわたる市民の学びを支え、地域の課題解決に役立つ図書館が南部地域に根付くものとなることを期待したい。